

慈母御逝去

文永四年八月十五日、聖人四十六歳の時に、聖人の母妙蓮女は亡くなられた。聖人の父妙日におくれることちょうど十年後である。大聖人のおなげきはいかほどであつたらうかと拝察される。

日蓮と名乗られて、父に妙日母に妙蓮と御名をさし上げたと伝えられておるが、聖人の一番最初の御信者はどのかたかという、御自分の父親と母親であつた。御信者になつた故に妙日、妙蓮と御名を授けられたとみるのが至当であらう。

自分の父親と母親とが、自分の一番最初の信者になつたというようなことは、ぼんやり考えると、何でもないように考えられるが、どうして、そんなものではない。

日本仏教史中に、偉い坊さんも沢山おるが、自分の両親を最初の信者にした方というような人は、聖人以外に絶対ない。

一休和尚の書簡集を読んだことがあるが、母親にあてた手紙の中で、自分の悟つたようなこと

は、なかなかお母さんなぞがわかるものではない、といった調子で、聖人の母に対する態度とは雲泥の相違を読んだのを忘れないでおる。

事実、自分の身近かな人を教化折伏するということは、まったくむずかしい。教化折伏する機会は沢山あるが、自分の修行とか実行とかが、折伏することと一致しないことを身近かな人は知っているのである。それで、折伏の効果があがらないともいえる。

大変に強信な信者の人の子孫が、少しも信心しないなんということとは、一寸も不思議でない世の中である。いくらでもその例がある。これは、どういうわけであろうか。

他人を教化するにいがしく、自分の子供を教化する隙がないともいえる。いや、そのうちに、自分の境地を子供がわかってくれるだろうという甘い考えもある。子供は子供で、いくら父親があんなことをいっても自分の行いはどうだ、なんて考えることもある。極端にいうと、お寺にあんなに御供養するなら、俺の小使いをもう少し増やしてくれたらよいではないかと考える。あんなに信心心と他人を教化することが大切なことなら、もう少し自分のお母さんや、自分に、やさしくしてくれたらどんなによいだろうと思っている。

父が母を大切にす。母が父を大切にす。この行為は子供を感動させるのだが、日本人の父

母は、子供の前では、どういう訳か、その反対なことを平気で行っている。子供はそんなことはわからないから、父をにくむと同時に、そんなに毎日毎日がみがみいわれてへいへいっている母親を、けいべつするということになるのである。

信心していても、いつていることと行っていることが別では、子供も信心はしない。信心をしているだけのことがあり、子供が多少でもうなずければ、子供は信心をする気になるであろう。むずかしいことだが、大いに注意しなければならないと思う。

信心をする人は、反省をしなければ信心したかいないといってもよい。

近頃は、親の方が子供に文句をいうのを遠慮しておるといったような世の中で、本当に困ったと思つているのだから、聖人の孝養觀をのべておくのもこの際無駄ではないと思う。

「孝と申すは高なり天高けれども孝よりも高からずまた孝とは厚なり地あつけれども孝よりは厚からず聖賢の二類は孝の家より出でたりいかに況や仏法を学せん人・知恩報恩なかるべしや」(全集一九二ページ)という開目抄の聖訓は誰でも知るところである。

「世尊と申す尊の一字を高と申す高と申す一字は又孝と訓ずるなり、一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば世尊と号し奉る」(法蓮抄全集一〇四六ページ)とある。

お釈迦さまは孝養では第一の人であるから、世尊すなわち仏さまというのだと教えておる。

仏は三十二相八十種好を具するというが、三十二相の中で最勝の相を無見頂相というのであ

る。

優婆塞戒經相業品に「一切世間の所有の福德は、如来の一毛の功德に及ばず。如来の一切の毛孔の功德は、一好の功德に如かず。八十種好の功德を集合すとも、一相の功德に及ばず、一切の功德は、白毫相の功德にしかず、白毫相の功德は、また無見頂相の功德に及ぶことを得ず」とある。——大智度論第四では白毫相を最勝とする。

さて、この無見頂相というのは仏が父母に孝養した報いによつて得たところの相であるといふのだから、いかに父母に孝養することが大切であるかわかるであろう。俗にいう、仏さまの頭のとつぺんは、誰もみたことがないというのが、この無見頂相である。誰もみたことがないのが常である。釈尊在世中において、もつとも通力がすぐれたといわれるバラ門教中の竹杖外道が、釈尊の頭のとつぺんをのぞいてみたいと思つた。

頭のとつぺんをのぞいてみるのには、その高さがわからなければならない。俗に、釈尊の身長は一丈六尺というのであるが、竹杖外道はそれは為にする宣伝であると常に疑つていたのである。そこで一丈六尺の竹の杖をもつていつて釈尊をはかるうとしたところが、何時はかつてみても、丈六の竹杖が、不思議にも、釈尊のステッキぐらいにみえるのである。すなわち丈端において一

丈六尺を出過すと書いてある。はかる度毎に、仏身はますますたかくなって、よく、その実をはかることができず、ついに杖を投げて去ったといわれる。

懷調世界の思惟華仏の弟子たる、応持菩薩が釈尊の御身をはかろうとした話もある。すなわち、釈尊がある時、ハラナ国に布教に行かれたが、この時、応持菩薩が、このシャバ世界にきて、釈尊のところにもうでて、仏の御足を礼拝して、めぐること千辺もしたが、釈尊の御身の長さをはかりたくなってしまうた。そこで、応持菩薩は神通力をもつて、身を変ずること三百三十万里の高さになって、仏の無見頂相をみようとしたところが、あにはからんや、釈尊の身の高さは五百四十三兆核二億里であつたという。女へんに亥と書いてカイと読む。今はこんな字はないが、カイとは数の極まるところを核（カイ）という万々なりとある。十兆を経といい十経を核というとある。何故こんなことをいうかという、昔は億とか兆とかは、一生涯にあまりぶつからない計数の觀念だと思つていたのに、最近では国家の予算が一兆というのだから、この分で行くと、後十年もたてば日本国家の予算も一核ぐらいになるかも知らないので、わざわざ核の字の講釈を試してみた。

さて、釈尊は、この時、神通力をもつて、応持菩薩をして、もつともつと上の方へ引きあげ、百億恒沙（恒沙とは印度の恒河の砂の意味で、無数無量の大数を表わす）の世界を通りすぎて、蓮華莊嚴という世界に應持菩薩を至らしめたが、まだまだ応持菩薩は釈尊のいただきをみることに

ができなかつた。そこで、蓮華莊嚴世界の仏さまである蓮華仏に、応持菩薩が、釈尊のいただきはどこまでいったならみることができるとしようかと、問うたところが、蓮華仏は、さらにこれより恒沙劫（劫も数の無量を表わし種々な説明がある。一説をあげれば、方四十里の石あり、三年に一度天女が舞い下りて、羽衣でさあつとなでる。そしてその石がなくなつた時を一劫という。また、梵天の一日はすなわち人間の四億三千二百万年を一劫という）をすぎても、仏のいただきはみることが出来ないといわれたとある。

竹杖外道の話も、応持菩薩の話も、無見頂相とはいかなるものかを説明して、父母の孝養がもつとも大切であり、父母の孝養を忘れたる、仏道修行も信心もないのだということをお教えているのである。

故に、法蓮抄には「釈尊塵点劫の間（塵点劫とはこれも数量を表わす。たとえば、大千世界をくぐりてみじんとなし人間の百年に一塵をとつて、とりつくすのを一劫という。別説もあるが略す）修行して、仏にならんと、はげみしことは何ごとぞ。孝養のことなり」とあつて、仏道修行の空極は孝養にあるのである。

聖人においても孝養の自信たるや釈尊にゆずるものではない。すなわち「教主釈尊の父母の御ために説かせ給いて候経文なり（略）日蓮が心中に第一と思ふ法門なり、父母に御孝養の志あらん人びとは法華経を贈り給うべし」と言われている。日蓮は日本第一の法華経の行者なりといわ

れておる。法華經の行者はまた日本第一の孝養のものでなければならぬ。なぜならば、法華經は内典の孝經であるといわれておるではないか。

經文にも「若し父母に信なくんば、教えて信ぜしめよ、戒なくんば戒をあたえよ、きかずんば、きかしめよ」（父母恩難報經）とあるが、以上をもつてしても、聖人の父母がまつ先に、聖人の御信者になつた因縁がうなずけると思うのである。

これ程聖人が思つておられた慈母が、文永四年八月十五日亡くなられたのである。

聖人は慈母の墓の側に庵を結んで、一百日間、法華經を讀誦して御報恩申し上げたといわれる。

出家なればいたしかたないが、六十一年の生涯中、母親の許にあつたのは、わずかに十二年間である。鎌倉にいつてからの聖人の噂で、善い噂を母はきいたことはあるまい、そして最後に自分の息子は、伊豆の伊東に流されてしまったのである。それでも聖人の母は、聖人への信頼を失わなかつた。しかし、聖人は母親に心配のみかけて、よきたよりを生涯中きかせなかつたことを心痛されたと思うのである。聖人の孝養を以上のべてみたが、聖人はなお孝養たりずとなして、「日蓮が母存生しておわせしに、仰せ候いし事をも、余りにそむきて候いしかば、今おくれ参らせ候うが、あながちに、くやく覚え候えば、一代聖教を考えて、母の孝養をつかまつらんと存じ候」

と御自身でいわれておる。